

関連領域の理学療法として、代謝疾患を取り上げました。関連領域における理学療法の意義と実際に続いて、糖尿病、アミロイドーシス、急性ポルフィリン症等について、発症のメカニズム、神経症候の特徴と機能予後、リハビリテーションとしての包括的な関わりなどを解説していただきました。本企画を通して、理学療法の裾野の広さを再認識するとともに、全身・リスク管理を念頭においた理学療法の展開を促す契機となれば幸いです。

■関連領域の理学療法(内山靖, 論文)

理学療法がこれまで培ってきた知識・技術を1人でも多くの患者さんに、安全かつ効果的に実践することを目的に、関連領域の意味、関連領域の理学療法の進め方、代謝疾患を有する患者に対する理学療法について具体的に述べた。

関連領域とはその時代の相対的な位置づけであり、理学療法の進歩とともに適応範囲が広がり、新しい領域として認知されるように基礎的研究と臨床の実践を継続して努力することは私たちに与えられた使命である。

■糖尿病患者のリハビリテーション(高塚博, 論文)

糖尿病の特徴は慢性の高血糖と糖代謝、脂質代謝、蛋白代謝の障害である。長期間の代謝異常の結果、様々な合併症を発症する。糖尿病合併症は無症候であるのが普通であり、無症候性心筋梗塞など重篤な全身合併症への注意、末梢循環不全に対する訓練時間、休息時間の設定が重要である。患者の状態に応じたりリスク管理、訓練プログラムの立案ができることを目標として、糖尿病の本質、合併症発症のメカニズムを中心にまとめた。

■アミロイドーシスと理学療法(山鹿真紀夫, 他論文)

アミロイドーシスは、アミロイド蛋白が全身、局所の臓器・組織に沈着し機能障害をきたす一連の疾患群である。日常よくみられる疾患にも関係していることが明らかになり、その重要性が再認識されつつある。分子生物学的な最近の知見と、神経症状を呈しリハ施行上問題となる家族性アミロイドーシスの臨床症状・所見、リハアプローチ、更に最近話題になっている生体肝移植による治療について概説する。

■ポルフィリン症と理学療法(矢野雄三論文)

遺伝性疾患であるポルフィリン症には8つの病型があり、このうち麻痺などの神経症状をきたすのは、急性ポルフィリン症と呼ばれる一群である。神経症状としては末梢神経障害が多く、ギラン・バレー症候群に類似し、リハビリテーションの進め方もほぼ同じように考えてよい。ただ、本症では禁忌薬剤が多く、治療上あるいは経過中、十分な注意を要する。

■脳髄黄色腫症の障害像とリハビリテーションアプローチ(木村伸也論文)

脳髄黄色腫症の2例のリハビリテーションアプローチの経験を紹介した。中枢性麻痺あるいはパーキンソンニズムによる尖足とアキレス腱・足底等、黄色腫による疼痛に対し短下肢装具あるいは靴型装具が有効であると同時に拘縮の早期からの予防が重要であること、薬物療法の効果等疾患レベルの予後を詳しく予測してリハ方針を決定すること、虚血性心疾患や骨粗鬆症等のリスク管理が重要であることを述べた。